

## 井上神父の言葉に出会う（42）

### ○ 二つの神学のベクトル

思うに「贖罪論」というのは根底に、「厳しい神」「怒りの神」、「父性原理」の神が想定されているのではないかと思うのです。

〈贖罪の目的は、原罪に対する神の怒りを慰撫し、神からの離反を克服して救いを得ることにある。〉（『岩波 哲学・思想事典』七八八頁）

今ここでは、「原罪」ということに深入りしませんが、「贖罪論」の根底には、罪深いわたしたちに対する「神の怒り」があり、その「怒り」は何らかの「代償」や「犠牲」を払わなければ済まされない、「慰撫」されないという神の性格が前提されているのだと思います。これは明らかに「父性原理」の神です。

そして、ユダヤ教から受け継ぐこの傾向の強い西欧キリスト教が日本に入り、武士道と

結びつき、道徳主義的イメージを強くしていった、と解釈することもできるのではないのでしょうか。

日本人へのキリスト教伝道に、贖罪論につながる生贄思想はネックになるという遠藤周作の主張は、本連載第一部で取り上げたように、井上神父が「五つの救済論」を検討した結果、「償い理論」や「贖い理論」ではなく、「初穂理論」によって、キリスト教の「救い」を表現することが、日本人への伝道にとってベストである、と述べていることともつながります。それゆえに、前述したように、井上神父の著作にはほとんど「贖罪」「贖い」が出てこないのでしょうか。

結局、井上神父や遠藤は、イエスの「死」あるいはイエスの「十字架の死」の意味を問うとき、日本人の感性からという理由で、贖罪信仰から距離を置くことになります。そのことが「一部の牧師さんたち」から非難され

る最大の原因——「井上神父の神学はイエス教であって、キリスト教ではない」など——となったのだと思われます。

一方、青野太潮氏は、「贖い」一辺倒のキリスト教に対して、贖罪論より「十字架の神学」にこそ、パウロの、またイエスの示した福音の真骨頂がある、と主張します。

こうして、二つの神学の切込み方に違いはあっても、贖罪論的傾向の強い西欧型キリスト教に対する留保という一点においては、遠藤—井上アッバ神学と青野神学が、同じベクトルを持っていると考えられるのです。そして二つの神学の共通項として、前に指摘したように、どちらの神学も母性原理を基調として展開されるということ。これらのことは、先の「ハンドブック」の遠藤の言葉からも、日本人の神学的方向性という観点から、わたしたちに大きな励ましを与えてくれるものと思います。

そもそも、「パウロの立場を中心課題とし

て」新約聖書を理解することによって、アッバ神学への決断が得られたという井上神父であってみれば、まさにパウロ研究第一人者の青野氏と強い縁があったということにもなりましょう。

以上のように、青野神学に刺激を受けながら、井上アッバ神学を学ぶにつれ、わたしの中では、改めてイエスの「十字架」と「死」の意味を思い巡らしてみなければならぬと思うようになったのでした。

### ○ 井上アッバ神学の「十字架」

すでに本稿では、

結論から先に言ってしまうと、「私たちが神の御手に迎え入れられることができるようになったのは、ひとえに十字架の死をも含めたイエスの全生涯のおかげなのである、…  
(『風のなかの想い』七七頁)

という井上神父の言葉を引用し、

〈…罪や弱さや特に苦しみにあえいでいるわたしたちを、全生涯にわたって自ら手を差し伸べ、積極的に担ってくださっているイエスの共苦的＝悲愛の姿勢は、十字架において頂点に達し、それがまるごと復活を通してアッパなる神に受け入れられ、神の国へと抱き上げられるのだ、と〉(『心の琴線に触れるイエス』四〇頁)

わたしは要約しました。

そうしたことがもっともよく私たちに語られているのが、イエス様の生涯、とくに十字架の死ではないでしょうか。最近キリスト教のシンボルのように考えられる十字架ですが、イエスさまの十字架に静かにそして真剣にむかいあってみたときに、そこから実に深いものが語りかけられ、訴えかけられてくる気がします。(著作選集5、一二頁)

これは、本誌九九号(四〇)で最後に引用

した所から続く、「イエスの孤独な十字架の死が示す栄光」という、小見出しがつけられた項の書き出しです。

文中「そうしたこと」とは、死が「苦しく寂しい時」ではあっても、「お借りしていたものを最後全部お返し」し、「神様の御手にお迎えいただく」人生の「完成の時」なのだという、内容を意味します。したがってここで井上神父は、わたしたちがそれぞれの「人生マラソン」を終えるとき＝「死」の意味を明示してくれているのが、イエスの「十字架の死」なのだ、と言っていることになります。

このような、いわば「死にがい」が——こんな言葉はもともとないのかもしれませんが——「生きがい」につながるという意味で、今この未曾有の高齢社会において、真剣に問われているのではないのでしょうか。わたしたち日本人キリスト者一人ひとりも、「イエスさまの十字架」が「語りかけ、訴えかけ」てくるものを、「静かにそして真剣に」黙想したい

ものです。

パウロは史実としてはおそらく、イエスの処刑を目撃してはいないでしょう。生前のイエスを直接知っていた可能性も低いと思われます。しかし、ファリサイ派であったパウロが、周辺のキリスト者を迫害していく中で、イエスの福音に触れていきます。そしてついにはミイラとりがミイラになって、パウロ神学——「十字架の神学」（命名はルター）を打ち立てることになります。

パウロの手紙にほとんどイエスの言行が書かれていないことから、パウロはイエスの生涯についてほとんど知らなかった、あるいは知っていても関心がなかった、という説もあります。とすれば、パウロがキリスト教に回心したのは、あのダマスコの劇的体験（使徒九章、ガラテヤ一章）だけによる、ということになりますが、井上神父も『キリストを運んだ男』などで述べているように、少なくと

もその下準備となった出来事がいくつもあったはずだと思うのです。その典型がステファノの殉教にパウロが立ち会ったという『使徒言行録』の記事——ルカの文学的脚色があるにしても——です。パウロは、それらキリスト者の殉教の姿が下地となって、あのダマスコの回心を経験することになったと推測できます。

その過程で、あるいはキリスト者になった後も数年きつと、直接会ったことはないイエスの生涯の意味、とくにあのむごたらしい十字架の意味は何だったのか、を自問しなかったとは考えられません。あれこれと考察を重ね、あるいは黙想したに違いないと思うのです。まさにパウロこそ、当時だれもが直視できず、目をそむけたくなるようなイエスの十字架に、はじめてまともに「静かにそして真剣にむかいあって」「そこから実に深いものが語りかけられ、訴えかけられてくる」ことを、体験した最初のキリスト者だったのだと思い

ます。わたしはこのような推測も、青野神学に接してから、確信をもって理解できるようになりました。

こうした経験と祈りのなかでパウロは、あの「逆説的な十字架の神学」を展開していきます。青野氏は、「信仰義認論は、パウロの十字架理解である」といいます。

### ○ 「赦しの晩餐」

イエスの「(十字架の)死」——ここでは井上神父は、青野氏が主張するように、イエスの「十字架」と「死」を区別してはいないのですが——について神父はまず、人間的な「挫折」と「悲惨」に注目します。

その内容として、十字架に架かる前の「孤独」をあげます。小見出しに「イエスの孤独な十字架・・・」とあるとおりです。すなわち、何度も「十字架の死の覚悟」を弟子たちに訴えたにもかかわらず、彼らはイエスに政治的

メシアを期待していたために、とんちんかんな反応しか示さない。最も愛した弟子たちのこのような「無理解」が、十字架に向かうイエスの心を大きな「孤独」に追いやります。あげく弟子たちはペトロ以下、すべてイエスを裏切り、逃げてしまうのですから、その「孤独」は筆舌に尽くせません。

しかしそうしたなかで行われた、いわゆる「最後の晩餐」を井上神父は、「赦しの晩餐」と位置づけます。

結局、最後の晩餐というのは裏切っていく弟子たちに対して、「おまえたちは私を捨てて散り散りに逃げるだろう、しかし私はおまえたちを見捨てない。ガリラヤで待ってるぞ」という赦しの晩餐なのです。(『著作集5』一三頁)

「最後の晩餐」は、「主の死を告げ知らせる」(一コリント一・二六)ために続くミサの原型と考えられますが、ここには遠藤周作

と同じように、弟子の裏切りという具体的な罪に対するイエスの赦しを見る、という井上アッバ神学の特徴がうかがえます（拙著『すべてはアッバの御手に』一三二頁以下）。そして、この「裏切り」という罪の具体性は、弟子たちに実感をもって「罪」を痛感させたのはもちろんのこと、そうした歴史状況的個別的な「罪（々）」に留まらず、パウロの視点について井上神父がいうところの「唯一根源的な」——青野氏いうところの「分割できない」罪をも、包括的に象徴しているのだと思います。

なぜならば、「裏切り」という具体的な行為の根底には、必然的に人間に普遍的な「弱さ」があり、「エゴイズム」があると考えられるからです。この意味では、「イエスはわたしたちすべての罪のために——forではなくby——死んだ」という言い方は史実に即しているということになります。したがって、この「最後の晚餐」＝「赦しの晚餐」は、人間の

根源的な罪を赦す宣言であったと言えましょう。

そしてここでも、イエスによる「裏切り」——罪の赦し宣言は、十字架の死を待たずに、完全に行われているということ。宣言はされたが、完全なゆるしは十字架の死において、というのではありません。

#### ○ 「赦し」とは「見捨てない」こと

もうひとつ注目すべきことにここでは、イエスが弟子たちと「晚餐」＝食事をするという行為自体を、「赦し」の証として井上神父が受け取っており、この引用文を含めその前後を見ても、マタイ二六・二八にあるような、イエスが自らを人々の犠牲として捧げるという贖罪論的言葉には、一切触れていないということです。それを「結局」というひとことで括っているようにも思われます。「犠牲」というユダヤの供犠的な、あるいは代償的な解

釈よりも、イエスが弟子たちを食卓に招いて食事を共にした事実を重視し、それが後の「裏切り」に対して先回りした「赦し」になっているのです。

さらに特徴的なのは、この「赦しの晩餐」を、弟子たちを「見捨てない」という、具体的な意味に解しているということです。わたしたちキリスト者は、贖罪論的かどうかは別にしても、イエスによる赦しということを経るとき、それが具体的に何を意味するかをそれ以上考えていないことが多々あるように思います。すなわち漠然と「わたしの罪はゆるされた」という所で安心していることが多いのではないのでしょうか。

しかし生前のイエスご自身は、ゆるし宣言とともに、たびたび人々を慰め、励まし、ときに病気の治癒を行いました。すなわちイエスのゆるし宣言には、実質的な「徴」が伴っていたのです。

そしてイエス最期の時が来たとき、死をこえて「私はおまえたちを見捨てない。ガリラヤで待ってるぞ」と、イエスは弟子たちに対する救いの実質を保証した、というふうに井上神父は解釈しているのだと思います。

〈おまえたちは私を捨てて散り散りに逃げるだろう、しかし私はおまえたちを見捨てない。ガリラヤで待ってるぞ〉

この言葉を聖書テキストで確認すると、『マルコ』では、最後の晩餐のあと、オリーブ山に出かける途上イエスが弟子たちに、

〈あなたがたは皆わたしにつまずく。「わたしは羊飼いを打つ。すると、羊は散ってしまう」と書いてあるからだ。しかし、わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く。〉（一四・二七～二八）

と言った言葉に対応します。『マタイ』（二六・三一～三二）もほぼ同様です。『ルカ』と『ヨハネ』には同様の言葉はありません。

いずれにしろ井上神父は、このイエスの言

葉を「最後の晩餐」＝「赦しの晩餐」の言葉として、受け取っているということになります。

ここでもう一度、聖書テキストと井上神父の言葉を比べてみましょう。

旧約聖書ゼカリヤ書一三・七（七十人訳）の修正引用を含むマルコー四・二七、

〈あなたがたは皆わたしにつまずく。「わたしは羊飼いを打つ。すると、羊は散ってしまふ」と書いてあるからだ。〉

を神父は、

〈おまえたちは私を捨てて散り散りに逃げるだろう、〉

に置き換えていると考えられます。

そして二八節、

〈しかし、わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く。〉

を、

〈しかし私はおまえたちを見捨てない。ガリラヤで待ってるぞ〉

と、敷衍しています。これにはヨハネ一四・一八、

〈わたし（イエス）は、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻って来る。〉

などの反映があるとは思いますが、少なくともこの原文には「見捨てない」という明示はありません。

こうして最後の晩餐を赦しの晩餐と受け取り、さらにその「赦し」の内実を「見捨てない」とと解する井上神父の捉え方を、わたしは非常に興味深く思います。というのは、この「見捨てない」をキーワードとして、すぐ連想するのが、イエスが息を引き取るときの言葉、

〈・・・「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」・・・  
「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」・・・〉（マルコー四・三四）



だからです。弟子たちに裏切られ「見捨てられる」イエスは、最後の晩餐で、それでも弟子たちを「見捨てない」と断言する。しかし挙句、イエス自身は神に「見捨てられて」しまう。少なくとも素直に、『マルコ福音書』を読めば、そういう流れになっています。

弟子を「見捨てない」と約束した神の子イエスが、「アッバ（パパ）」と呼べる慈父、悲愛の神に「見捨てられて」しまうという皮肉、悲惨、悲劇の物語——そのようにも福音書を読むことができます。

### ○ 「全裸」のイエス

さらに私が思うのは、全裸で民衆の前に吊るし上げられるのはすごい屈辱だということです。考えると、そうした孤独と苦悩と屈辱のなかで迎えたイエスさまの死ほどのひどい死に方をした人は、普通まずいないのではないのでしょうか。（著作選集5、一四頁）

歴史的にはイエスがかかった十字架が、わたしたちが見慣れている十字型ではなく、T型だったということは、求道し始めて割合早い時期に何かの本で知りました。しかしわたしにとってもっと大きな衝撃だったのは、これまたわたしたちが見慣れている磔刑図、教会の十字架像のようにではなく、イエスの腰には何も巻かれてはおらず——「全裸」であった、ということです。時期は忘れましたが、洗礼を受けてからだいぶ経っていたと思います。わたしは井上神父にお会いした時、「ちょっと変なことをお伺いしたいのですが・・・」と前置きして、このことを確かめたのでした。

まことにおかしな話かもしれませんが、もしかすると一部の人たちからは顰蹙——奇異な目でみられるかもしれないのですが、この「全裸」のイエスの十字架、ということを知ったとき、わたしの信仰の持ち方が少なからず変わったように思うのです。イエスを「神の

子」と讃える、後の信者たちが、せめて腰布を・・・、と考えたのは自然の人情だし、信仰の〈真実〉とも言えるかもしれませんが。しかし〈事実〉はそうではなかった。そしてわたしにとってこの事実は、井上神父が指摘する、イエスの「孤独と苦悩と屈辱」の極み——人間が経験する極限の苦痛を証するもの、直感させるものだったのです。(つづく)